

一般研究 研究報告書

研究課題

近代椅子式茶室前史の研究

― 中国文人達の空間と日本の文人達の空間比較

奈良文化財研究所 派遣職員

松本 康隆 研究代表

はじめに

本研究は、これまで日本文化と西欧文化の交流史の中に位置づけられてきた近代椅子式抹茶室の歴史を、中国文化との交流に注目してその影響を考察し、近世からの連続的な文化的土壌の上に生成されたものとして位置づけようとするものである。

茶文化の国際的な広がりや比較研究が進展するなか、茶室はともすれば一国史に閉じがちであった。国際的な研究においても、西欧文化と対比的に論じられる場合が多いと言えよう。本稿では、近年研究が進展する煎茶室を媒介にして、中国建築史との接続及び比較考察を試みる。

一・既往研究

アジア茶文化の比較研究、日本茶文化の源流としての中国茶文化研究

アジアの茶文化として、各国史に止めずそれを接続しながら比較する研究は少ない。熊倉功夫「茶の湯と士大夫」『アジアのなかの日本史VI 文化と技術』（東京大学出版会、一九九三）による、中国・朝鮮・日本の茶文化史比較、及び小川後楽「日本の煎茶道と中国歴代の茶」『茶道学大系7 東洋の茶』（淡交社、二〇〇〇）などが挙げられる。熊倉は、科挙によって創り出された中国・朝鮮の身分制度内にとどまる士大夫の茶と、身分制度がありつつ芸能化により身分を超えて普及した日本の抹茶文化の特質を指摘しており、示唆に富む。そして、小川は自身の膨大な煎茶研究の蓄積を、中国の茶文化と日本の煎茶文化の關係に重点を置いて整理及び考察を行ったもので、この分野の研究の基本的文献となろう。

中国の茶文化研究には、布目潮瀾、青木正児による一連の研究蓄積があり、特に主要な茶書の翻刻はこの分野における基本的文献となる。近年では、中国茶書の整理分類を行った高橋忠彦「中国喫茶文化と茶書の系譜」『東京学芸大学紀要人文社会学系I 第57集』（東京学芸大学、2006）が特に注目すべき研究成果と言えよう。

「待庵」の朝鮮起源説

茶室研究も一国史でのみ閉じていたわけではない。しかし、その独特な研究史的背景ゆえに、特に西洋建築と対比する対象として用いられはするものの、都城或いは寺院建築、或いはコロンニアル建築などのように東アジアの建築と接続しつつ比較する研究はきわめて少ない。それゆえ茶室の源流を朝鮮民家に求めた、中村利則「待庵原像」『別冊太陽』69、平凡社、1990・5）は一時大きなインパクトを与えたのみならず、貴重な研究成果であると言えよう。「待庵」と朝鮮民家の意匠的共通性だけでなく、建築材料や挟み敷居といった技術的観点からその共通性を明らかにした点で説得力を持つ。しかし、その後の研究的展開が見られない。一つのモノとモノを線で繋げるだけでなく、より広い研究的背景を用意しなければならない。

煎茶室・庭園研究

煎茶室研究の重要性にいち早く注目した横山正は、煎茶室を通して「明末から清朝にかけての中国のデザインの流入、あるいはその片鱗をもとにしての、日本人が中国風と考えたデザインの展開について考へ」（文人の好みとその空間）『茶道聚錦7 座敷と露地（一）』（小学館、一九八四）しており、数多くの文献と遺構からその特質を考察している。この分野の第一に推すべき基本的参考文献と言えよう。ここではまた、抹茶室と比較した煎茶室の特徴を挙げ、多くの示唆を与えている。しかし、中国建築と日本の中国風建築にどのような差異があるのかといった比較考察はなされていない。

近年は麓和善が「煎茶空間―その文献史的特質」『茶道学体系第六巻茶室・露地』（淡交社、二〇〇〇）において、膨大な茗筵図録の書誌学的な整理を行い、描かれた煎茶空間を分析し、「煎茶席と近代和風住宅」『庭園学講座XII 近代庭園と煎茶』京都造形大学日本庭園研究センター、二〇〇五）で実際の中国園林建築との比較考察を試みている。中国園林建築との比較考察はまだ手始めの感が否めないものの図録の整理は極めて貴重であり、本研究を進める上でも大きな恩恵を受けた。麓はまた清時代の『工程做法則例』の研究を開始しており、茶文化と絡めた今後の研究成果が期待される。本研究メンバーである矢ヶ崎善太郎は「文人達の数寄空間」『庭園学講座XII 近代庭園と煎茶』京都造形大学日本庭園研

究センター、二〇〇五）において、煎茶が求めた空間的特性が近代京都東山の「数寄空間」形成に与えた影響を指摘している。

庭園史の分野からは、霊鷲弘義が「近代日本庭園における煎茶の影響」、『史迹と美術』二〇〇七・七（九）において、明治末から昭和初期に煎茶空間が表から姿を消すと同時に煎茶空間と抹茶空間との融合がなされた、といった示唆に富む見解を与えている。

中国建築史研究

中国建築史の研究史は、田中淡の解説^{*)}に詳しい。1920年代に外国人研究者E・ベルシュマン、O・シレン、P・ムラー、関野貞、伊藤忠太、伊藤清造らによって近代的な建築史研究が開始され、少し遅れて村田治郎、竹島卓一らの論考が著された。

1930年代に入ると中国造営学社の設立及びその中の梁思成、劉敦楨らによって中国建築史学の基礎が築かれたとされる。

1949年の中華人民共和国成立後は、国家基本建設という目標の下、建築史家に様々な方針転換がもとめられつつも、精華大学において梁が遺構分析を中心に、南京工学院において劉が文献的考証を中心に、対象としても民家など、より広い建築種類の研究成果が蓄積されてきた。

一方、日本においては、1972年の日中国交正常化を機会にして、少しずつ現地における建築史研究が可能となり、田中淡『中国建築史の研究』（弘文堂、一九八九）といった、中国文献を駆使した、日本にかつてない水準の研究成果が挙げられるに至る。その後、天安門事件（第二次：1989）による一時中断があったものの、改革開放路線の推進とともに、いくつかの研究成果が挙げられた。本論と関係の深いものとしては、フィールド調査を中心にした成果とそれをきっかけとした現地留学による、木津雅代『中国の庭園山水の錬金術』（東京堂出版、1994）、高村雅彦『中国江南の都市とくらし水のまちの環境倦成』（山川出版社、2000）等が挙げられている。

近年は、経済的なグローバル化の進行とともに、日本におけるCOE、グローバルCOE制度を中心にして共同研究が推進され、研究成果が続々と挙げられつつある状況と言えよう。

本研究と関連の深い園林建築に関する基本的文献を本稿末の主要参考文献に挙げたが、劉『蘇州園林』が飛び抜けて情報量が多く、かつ技術解説書としても良くまとめられており、田中による質の高い訳とともに、本研究を進めるにおいて大きな力となった。

二、中国文人建築情報

中国文人建築を理解する上で、特に重要と思われる書籍から、ここでは日本においてこれまであまり触れられていない書籍の特徴を確認したい。

『营造正式』

『营造正式』に関して、管見の限り日本における研究は見られないが、中国においては劉敦楨「魯班营造正式」『文物』（一九六二、第二期）が見られ、『中国建築の歴史』（参考文献参照）にも記述があることから、明代の代表的な建築技術書ということができると思われる。清代の『工程做法則例』とは異なり、この技術書の特徴は、明代に遡るといふ時期的な相違だけでなく、民間の建築技術書として位置づけられるものであり、本論で対象とする私邸園林の建築と関連が深い技術書ということが出来よう。日本への伝来と影響は定かでないが、天一閣所蔵本が最も古いとされ、その複写版『明魯般营造正式（天一閣蔵本）』上海科学技术出版社、1988）が出版されており、本研究においては上海図書館所蔵の同複写版を考察対象とする。

この技術書の詳細な解説は今後の課題としたいが、これまでよく引用されてきた『園冶』との違いを確認しておきたい。『園冶』^{*)}が技術的理論書とはいえず、実際に自らの手で施工を行うものではなく、その文章が、「単なる庭造りの書物でなくて、彼の文学作品である」（橋川時雄『園冶』参考文献参照）と指摘され、著者自らも「官仕に出たこともあった」（橋川訳）と記しているように職人によるものではないことは明らかで、文人のための造園指南書といった性格がある。一方、この『营造正式』は寸法モジュ-

ルの「尺」の解説や、水平の取り方、曲尺といった大工道具にまで記述があり、職人のための技術書ということが出来よう。そして、架構法の図も図1に見られるように、先の『園治』に比べて情報がより具体的で、更に文章中にも柱高や棟高といった寸法まで記述している点で異なる。

三・現存する園林建築

では実際に現在中国に現存する文人たちの建築を見ていきたい。ここでは、日本の文人達に影響を与えた小説『紅樓夢』^{・三}の華麗な舞台となり、『長物誌』^{・四}でその雅俗が語られ、『園治』や『营造正式』で技術的情報が伝えられた園林建築に注目したい。市中の山居として都市内に実現させたこの園林建築こそ、日本における茶室とリンクするものと考えられるためである。

表1に一覧にしたのは、2008年12月26日から2009年1月6日まで、園林建築を中心に現地調査を行った建物計262物件である^{・五}。この中から特に2つピックアップして分析し、近年のものについてはその建設年代についてのみ少し触れる。なお、表の内容については、現時点で筆者が調べ得たものだけを載せているため、実際にはより多くの建物名や建設年などが認識されていると捉えて頂きたい。

時代的特色^{・六}

①明時代建設の物件

まずは既往研究から明らかになっている最古の物件を見ていこう。明時代の建設とされる物件で信頼性の高いものは2つあり、寧波天一閣の「百鵝亭」と蘇州芸圃の「乳魚亭」である。それぞれ石造と木造であるが、ここでは木造の「乳魚亭」を解説する。

現状を見れば、図2のように隅柱芯々約3.3メートルの正方形平面で吹放し、宝形造瓦葺である。構造を下からみていくと、石の基壇及び磚敷き土間に、直接大きく面をとった角柱を建て、頭貫で柱頭を繋ぎ、台輪を載せ、台輪上の大斗と間斗にはそれぞれ肘木と卷斗が載り、卷斗が支える通し肘木の上に丸桁が載る。そして、特徴的な小屋組であるが、四隅の斜めに虹梁を渡し、これを先の間斗が受けている。この虹梁は丸桁の下に位置するため、火打ち梁のような役割はなさない。虹梁の中央に斗があるのは、隅柱上から出された桔木状の部材で母屋桁を支えるためである。そして、この母屋桁と先の丸桁で天井の勾配が決まる。また、この母屋桁の位置で天井が設けられ、棟束も天井板に載った形となっている。そして、屋根の四隅は反り返っており、中国建築独特の「水戩発戩」が見られる。

塗装を見ると、頭貫を境にして上下が異なり、上部の斗栱、虹梁、天井などには彩色が施されている。そしてその彩色文様は斗栱間に嵌められた透かし彫りの意匠ともリンクする。また柱の塗料も年代を経た漆塗に見える。

平面を見ると、隅柱と間柱の断面寸法は異なり、更に池に面した西側のみ間柱は省略されて眺望が確保されている。そして、東側中央柱間の入口以外には腰掛と背もたれが設けられている。なお、中央に置かれた机の天板となっている磚には「同治八年」（1869年）の年号が見られる。

さてこの「乳魚亭」であるが、一つ衝撃的な写真がある。図2左下の写真は童齋『江南園林志』（参考文献参照）に掲載されているもので、遅くとも1963年以前に撮影されたものである。あまり鮮明ではないが、写真を見ると、池に面しているように見え、背の高い基壇上に建ち、腰掛けや高欄はなく、板壁があり屋根の反りも緩やかに見える。現状がどの程度まで旧状を留めるのか更なる調査が必要であるが、腰掛と高欄は現状園林建築の一つのフォーマットとなっているため、恐らく近年の公開にあたっての改修と考えてよいであろう、水戩発戩及び西側間柱の有無は疑問を残すところであるが、柱より内側の小屋組は管見の限りこの物件独特のものであり、その彩色と風食具合とともに明時代の遺構と考えられる。

②清時代建設の物件

清時代の建設と考えられる物件はいくつかあるが、ここでは先の亭と規模が異なり、既往研究によって断面を把握することができ、光緒年間（1875～1908）という建設年もおおよそ信頼でき、空間構成や裝飾的にも発達が見られる蘇州留園の「林泉耆碩之館」について触れる。

図3に見るように平面は桁行5間×梁間2間で、南北に開放性が高く、双方に中規模以上の園林建築に多用される吹放し廊を設ける。建物内の構成は南北に平面を分けた「鴛鴦庁」といわれる形式の典型的なプランである。軸組を見ていくと、石と磚による基壇に石製方形の礎石、その上に石製円形の礎盤が据えられ、円柱が建てられている。柱と柱は地覆（板壁部分のみ）、飛貫で連結する。柱上に梁、梁の上に桁が載る折置組はシンプルな平面と対応している。そして、巻棚の化粧屋根裏に合わせて二点支持で小梁を重ね、小屋裏の棟木は中央の柱がそのまま伸びて一材で支えている。塗装は何度も塗り重ねられた趣があり、部材も古さを感じさせる。漆塗以外に彩色はみられず、装飾はもっぱら梁の浮彫、單の透かし彫り、掛落や窓の組子などに注がれている。

③ 中華民国及び中華人民共和国以後建設の物件

この時期の建設になるものは、RC造による新しい試みと復原的新築の二種に大別することができ、ここでのその詳細解説は省く。ただ、復原的新築の時期について少し触れておきたい。

拙政園と豫園の整備は木津『中国の庭園』（参考文献参照）に詳しい。表2は拙政園の変遷を劉・田中『中国の名庭』の情報も加えて整理したものである。過去に遡ると数々の変転を経ていることがわかるが、ここでは1951年から整備が開始され、建造物の修復及び新築が行われていることに注目したい。一方、豫園の整備は、その第一期が1958年から約2年の歳月をかけて主要な建造物の修復や新築が行われ、第二期の1986年は扉や橋の復原など、観賞用の動線計画や空間の間仕切りを中心とした復原的工事、第三期の1988年は戲台の修復が行われている。

つまり、1961年の第一次全国文物保護単位へのリスト化へ到る、1950年代に園林建築の修復及び新築の波があることは確実視され、今回の調査対象物件の拙政園、留園、豫園内の物件の古いものはこの時期に修復を受け、新しいものの多くはこの時期に新築されたものと考えられる。また、これらの工事には『工程做法則例』の大きな影響が予想されるが、その考察は今後の課題としたい。

四、煎茶室

黄檗山萬福寺「大雄宝殿」

次に煎茶室を見ていくが、その前に煎茶の総本山とされる萬福寺の建築について確認しておきたい。寛文8（1668）年に上梁された、萬福寺の諸建物の中心的存在で、規模も最大の「大雄宝殿」を例に見る。図4に見られるように、外観、内観とも目に見える部分は園林建築と共通点が多いが、天井裏に隠された小屋組は小屋束と貫が整然と並ぶ日本の近世に発達した特徴的な構造となっている。黄檗天井として著名な吹放し廊の天井は園林建築と特に共通性が高いものと言える。浅井健一「黄檗山萬福寺における中国的なものをめぐって」（『文建協通信』79、文化財建造物保存技術協会、2005・1）で指摘されているように、萬福寺の建設に中国人技術者は確認できず、萬福寺はあくまで日本の建設技術を用い、「中国的な意匠をちりばめることによって実現されたもの」と言える。煎茶道はこのような建築的特徴を持つ萬福寺を発祥の地、そして総本山とし、その後の発展を遂げることとなった。

「有声軒」と高遊會の各茶席

やや時代的に下るが、右の萬福寺境内に昭和3（1928）年に建設された「有声軒」を取り上げる。この茶室は、昭和初期に煎茶道復興を祈念して売茶堂と共に建てられたものである^{＊6}。これらの落慶記念とともに及び高遊會による茶会が開かれたが、その茶会の様子を具体的に伝える資料が『高遊會茗筵図録』第壹・三輯（編輯兼発行人篠野治三、発行所やまと雅報社寫眞部）である。「茗筵図録」とはいえ、多くの茗筵図録が描かれた絵を主体にしているのと比べ、写真が主体になっているのがその特徴といえよう。この史料から確認できる茶室をまとめたものが表3で、図5のように絵画的な空間や立礼席、客のみ腰掛式のものも見られる。山内のあちこちで茶席や展観席が設けられ、一山あげての大茶会であった。

右記の様な場所、時期、意図、規模で建設されたのが、「有声軒」である。図6に掲載したその主室を見ていこう。平面は六畳、炉は切られておらず、煎茶専用の茶室であることがわかる。そしてこの室を

最も特徴付けている、石敷きの土間が矩折りに付属している。土間の幅は約1・3メートル、ここに配された瓦敷（椅子）に腰掛けて茶を喫するのに充分の広さといえよう。基礎は礎石に杉磨丸太を建てる形とするが、土間基壇の下に礎石が残り、土間表面の石の上に直接柱が建つのは、この土間が後の改造或いは工事中の改変で形成されたことを示す。それを明らかにする決定的な写真は『高遊會茗筵図録』に無く、今後の説明が待たれる。さて、柱の上は室内や土間側にそれぞれ杉磨丸太の桁が載っているように見せつつ、実際の柱上には断面寸法の大きい角材の桁が載る。その角桁上に梁を渡して京呂組とし、梁上の小屋束が母屋桁や棟木を支えている。

また、「切壁下地」とも言われ、抹茶室を含む通常の数寄屋建築に多用される貫が、壁中の見えないところで構造上重要な役割を果たしているのは確実であろう。

空間構成も抹茶室と多くの共通点を持つ。抹茶室的な解説をすれば、下座床の構えで逆勝手、床前は平天井、正面貴人口側は掛込天井、点前座を垂れ壁で区画した落天井とし、真行草のヒエラルキーを持った三段構成となっている。そして中柱に見立てた赤松皮付柱（取り外し可能）が点前座を区画する。煎茶室の特徴としては、抹茶室では逆勝手であるが煎茶室としては本勝手であること、茶道口の襖から一步踏み込んだ位置に無目の鴨居を設けた帳を吊るための工夫、煎茶の意匠要素として多用される氷裂模様の下地窓そして、抹茶室と比較して開放的な点などを挙げる事が出来る。

五・園林建築と茶室の比較

園林建築と茶室との違いをまとめたものが表4である。（煎茶室と抹茶室をひっくり返して比較し、特に区別したいときのみ煎茶室、或いは抹茶室として比較する。）その違いの要因として技術・機能・社会・習慣・美意識（「美」とは極めて近代的な概念であるが、ここでは長物誌で述べらるような「雅」「俗」の違い、あるいは抹茶室に求められる精神的な要求を含むものとする。）といった区分けは試みに行ったもので、それぞれその判断理由を備考に記した。ここでは両建築の大きな違いの一つである窓についてのみ触れる。

園林建築で「明窓浄几」とよく言われるのは、「明るい窓、清浄な机が書斎における理想的なすがたであること」を象徴的にいいあらわしたもの（中田『文房清玩五』参考文献参照）とも解説される。そのため窓には面的に最大限かつ画一的な大開口部を採用し、繊細かつ多様な格子が配されると解釈することが出来る。一方抹茶室にはその精神的雰囲気をつくり出すために光を極力抑えつつ、壁中の貫という技術に支えられて、風炉先窓、墨跡窓といった必要最小限かつ機能的な窓を配置的自由度をもって配していると言える。煎茶室はそのような抹茶室に「明窓浄几」の理想を実現すべく、追加的に氷裂窓を付加、或いは大開口部を導入したものと見えよう。

つまり、園林建築と抹茶室では美意識の違いがみられ、それが技術的な違いを生んでいる、或いは美意識と技術が密接に関連しながら相違が生まれている。

六・結語

本研究は椅子式抹茶室成立にいたる文化的土壌として、近世からの連続性と中国文化の影響の考察を試みた。椅子式抹茶室成立よりかはるかに以前に椅子式煎茶室の前例がみられることは前年度に触れたが、椅子式抹茶室成立期とほぼ同時期に煎茶の総本山に建てられた茶室も椅子式煎茶室となっていた。その椅子座が付設された時期は解明できなかったが、同時期の茶会には立礼式煎茶席が見られ、それまでの茗筵図録にも散見されることから、煎茶室において椅子席は一つのバリエーションとして捉えられていたと言えるであろう。そして最終的に全国の煎茶室を代表すべき「有聲軒」は椅子式茶室が採用された。煎茶室の理想的空間は中国文人達のそれに求めていたが、実際の中国文人達の園林建築と比較すると、多くの技術的な違いが見られた。一方で、吹放しの空間、窓意匠、土間といったところに共通性が見られた。同様の空間を希求しつつ異なる技術的基盤で実現されたため、両者の相違が生まれたと言えるであろう。そして、その技術的違いは、抹茶室文化との技術的違いや美意識の違いに原因を求めることが出来た。

近代における煎茶道から抹茶道への揺り戻しの時期に、煎茶室を実現させた技術者は再び抹茶室建設

へと向かうこととなる。そして、住友吉左衛門に代表されるように、煎茶を楽しむ人々も抹茶室を建設するに至る。そこで希求された空間には煎茶室の理想的要素も存分に含まれていたことは想像に難くない。畳上に敷かれた絨毯＋西洋風チェアによる椅子式抹茶室が建てられる一方、磚敷きや石敷きの吹抜し土間空間、あるいはそれを畳座敷外周に付設する椅子式茶室は、明らかに煎茶の影響、ひいては中国文化の影響と言うことができるであろう。以上、近代椅子式抹茶室の成立は、日本と中国の文化交流史の中にも位置づけることが出来る。

今後の展望

中国建築と日本建築の比較を軸に研究をすすめたため、椅子式抹茶室前史として肝心の煎茶室情報の収集が手薄になってしまった。また、文人画の情報収集及び考察にも時間を費やしたが、その成果を出すまでに到らなかつた。今後の課題としたい。しかし、これまでその国独自の「伝統建築」として他国建築との接点的な比較考察が少なかつた茶室史を、いくぶん国際的な研究として行うことができたのではないかと思われる。今後は、欠けている情報収集を行いながら、実証的精度を上げて行きたい。

そして論を進めるならば、日中の文物交流、或いは人の交流を通じて、文人達の理想的空間が共有されてきたと言えるのではないか。それは朝鮮などを含め東アジアの文人建築空間として一体的に捉える研究可能性を示す。茶文化はその中で一つの核となろう。

一歩退いて見ると、茶室と園林建築を比較するのは無理があるように見える。しかし、茶寮とのみ比較してもそれは当を得ないであろう。このような研究をさせるところが、日本における茶文化、或いは日中文人たちの茶文化の重要性とも言える。

また、近代以前に国を超えた文人達の共有空間が存在していたならば、更に論を進め、近代以降の「伝統建築」の生成・量産とともに、その共有空間が引き裂かれる過程を描くことができるかもしれない。今回の調査の副産物として、中華民国・中華人民共和国以降に新築された園林建築の存在が明らかとなった。(図7) このことは伝統的な建築の近代の変容を比較研究することが可能であることを示すだけでなく、かつてなく日中間の文物や人が行き来した近代、その時代における共有空間の変容について実証的考察が可能であることを示す。

謝辞

前年度から引き続きの本研究にあたって、五島美術館、全日本煎茶道連盟、船阪富美子氏、谷晃氏、包慕萍氏、牟海濤氏、北村統之氏による多大な協力を得た。記して謝意を表させて頂きたい。

中国園林に関する主要参考文献

後藤朝太郎『支那庭園』成美堂書店、一九三四

童寓『江南園林志』中国工業出版社、一九六三

岡大路『支那庭園論』彰国社、一九四三

陳從周『蘇州園林』同濟大学建築系、一九五六

(日本語訳：路秉傑、横山正『蘇州園林』リポート、一九八二)

中田勇次郎『文房清玩』一、五、二、五、三、一、九六一、一、九七六

建築工程学研究部建築理論及歴史研究室中国建築史編輯委員会編『中国建築簡史・第一冊・中国古代建築簡史』中国工業出版社、北京、一九六一

(日本語訳：建築工程学研究部建築理論及歴史研究室中国建築史編輯委員会(編) 田中淡(訳) 編)『中国建築の歴史』平凡社、一九八一)

杉村勇造『中国の庭』求龍堂、一九六六

橋川時雄『園冶』渡辺書店、一九七〇

上原敬二『園冶』加島書店、一九七二

Maggie Keswick『The Chinese Garden』London、一九七八

陳從周『園林談叢』上海文化出版社、一九八〇
劉敦楨『蘇州古典園林』中國建築工業出版社、一九八〇
(日本語訳：劉敦楨(著) 田中淡(訳)『中国の名庭―蘇州古典園林』小学館、一九八二)
陳從周『揚州園林』上海科學技術出版社、一九八三
(日本語訳：陳從周・路秉傑『揚州園林(漢日对照)』同濟大學、二〇〇七)
陳植『園冶注釋』中國建築工業出版社、一九八一
雜誌『古建園林技術』一九八三
木津雅代『中国の庭園』東京堂出版、一九九四
荒井健他『長物誌』1、3、平凡社、一九九九～二〇〇〇
田中淡・外村中・福田美穂(編)『中国古代造園史料集成… 増補哲匠録 疊山篇 秦漢―六朝』中央公論美術出版、二〇〇三

*一 田中淡による解説は以下を参照した。「中国建筑学解放後のあゆみ」『建築雑誌』1102、日本建築学会、一九七六(一)、「訳者解説」『中国の住宅』SD選書、一九七六、「後記」『中国建筑史の研究』(弘文堂、一九八九)

*二 『園冶』は明代中国の代表的造園理論書とされ、これまでの煎茶室研究でも度々引用されてきた。敷地倦状から造園、建築構造から細部意匠に到るまで、その内容が網羅的かつ具体的に記されている。建築についても断面図にあたる「架梁式」まで記載され、装飾においては窓格子や欄干の意匠図が充実している。

*三 清代中期のものとされ、『長物誌』などと比べ時代は下るが、小説の一つの重要な舞台である「大観園」が蘇州の園林「拙政園」をモデルにしたとも言われる。理想化されているとはいえず、園林における優雅な生活を垣間見ることのできる貴重な小説であり、その流通と伝世は同時代のみならず、後世に与え続ける影響も大きいと言えよう。特に、挿絵には先の技術書やノウハウ本に匹敵するような直接的影響を与えた可能性があり、また、内容はより広い人々に美的空間を共有させる役割を担ったのではないかと思われる。

*四 明代の文人生活のノウハウ本ともいべき書籍は、『遵生八牋』『考槃余事』を代表としていくつか挙げられるが、文震亨による『長物誌』もその一つで「明代文人のもっとも理想的な趣味生活のすがたを知るにはこの本が最適である」(中田『文房清玩五』参考文献参照)とも言われる。

*五 できるだけ大量の数を実見するため、写真による情報収集に頼らざるを得なかったが、撮影は全景、内観、平面、基礎・柱・桁・梁の軸部や小屋組など、また特徴的な意匠や材料といったものを把握できるように努めた。また、重要かつ必要と思われるものに遭遇した場合、適宜その場で構造・意匠解説や簡単な実測図などを記入した調書を作成した。その場で調書を作成した数は杭州3件、寧波1件、蘇州1件である。

*六 今回の調査で、改めて実感されたのは、やはり建設年の確定作業の困難さであった。既往研究や解説にも、園林の成立に関しては年代的な記述が多く見られるものの、個別の物件に関してはほんの僅かしか明らかにされていない。そして、実際にモノを見て材料に塗料が塗られているものがその殆どであるため、年代推定は難しい。各園林や公園などの整備記録などから、その改修や新築、復原の記録をあたることが必要であるが、今回はそこまで出来なかった。既往研究による成果以外では、塗料の塗り重なり具合やその下の材料の倦に見る風化具合といった微妙な違い、そして、独特の構造倦式や細部意匠、或いは鉄筋コンクリート(RC)造といった新建材によっておおよその年代判定を推定することしか出来なかった。

*七 『煎茶道のすすめ』社団法人全日本煎茶道連盟、1975

*八 例えば麓「煎茶空間―その文献史的特質」(前出)で図が掲載されているものだけでも、『清湾茗筵図誌』(明治9年)、『角山春篁翁薦事図録』(大正11年)などを挙げる事が出来る。

表1 園林建築現地調査リスト

89	寧波	月湖周辺	不明(閻帝廟内)	不明
90	寧波	月湖周辺	人防建築	不明
91	寧波	月湖周辺	不明	不明
92	寧波	月湖周辺	点秋堂	不明
93	寧波	月湖周辺	不明	不明
94	寧波	月湖周辺	不明	不明
95	寧波	月湖周辺	不明	不明
96	寧波	月湖周辺	袁宅	不明
97	寧波	月湖周辺	沈香醉月	不明
98	寧波	月湖周辺	映月亭	不明
99	寧波	月湖周辺	含香亭	不明
100	寧波	月湖周辺	碧沚亭	不明
101	寧波	月湖周辺	鼎上樓茶館	不明
102	蘇州	平江沿い	三異亭	2000以後か
103	蘇州	拙政園(中央部)	不明(中央部小門)	不明
104	蘇州	拙政園(東部)	不明(東園部大門)	1959頃か
105	蘇州	拙政園(東部)	不明(東園部中門)	1959頃か
106	蘇州	拙政園(東部)	蘭雪堂	1959以後
107	蘇州	拙政園(東部)	芙蓉榭	1959頃
108	蘇州	拙政園(東部)	天泉亭	1959以後
109	蘇州	拙政園(東部)	秫香館	1959頃
110	蘇州	拙政園(東部)	放眼亭	1959頃
111	蘇州	拙政園(東部)	青涵	1959以後
112	蘇州	拙政園(東部)	不明	1959以後
113	蘇州	拙政園(中央部)	四面亭	不明
114	蘇州	拙政園(中央部)	聽雨軒	不明
115	蘇州	拙政園(中央部)	嘉爽亭	不明
116	蘇州	拙政園(中央部)	玲瓏館	不明
117	蘇州	拙政園(中央部)	繡綺亭	不明
118	蘇州	拙政園(中央部)	遠香堂	不明
119	蘇州	拙政園(中央部)	倚玉軒	不明
120	蘇州	拙政園(中央部)	荷風四面亭	不明
121	蘇州	拙政園(中央部)	雪香雲蔚亭	不明
122	蘇州	拙政園(中央部)	北山亭	不明
123	蘇州	拙政園(中央部)	梧竹幽居	不明
124	蘇州	拙政園(中央部)	倚虹	不明
125	蘇州	拙政園(中央部)	綠漪亭	不明
126	蘇州	拙政園(中央部)	見山樓	不明
127	蘇州	拙政園(中央部)	柳陰路曲	不明
128	蘇州	拙政園(中央部)	別有洞天	不明
129	蘇州	拙政園(中央部)	激瀉樓	不明
130	蘇州	拙政園(中央部)	香洲	不明
131	蘇州	拙政園(中央部)	得真亭	不明
132	蘇州	拙政園(中央部)	松風亭	不明
133	蘇州	拙政園(中央部)	小滄浪	不明
134	蘇州	拙政園(中央部)	志清堂	不明

45	杭州	三潭印月	花鳥亭	不明
46	杭州	三潭印月	迎翠軒	1880
47	杭州	三潭印月	南■	不明
48	杭州	三潭印月	記亭	2005再建
49	杭州	三潭印月	亭亭亭	不明
50	杭州	三潭印月	開網亭	不明
51	杭州	三潭印月	先賢祠	不明
52	杭州	三潭印月	小瀛洲軒	不明
53	杭州	三潭印月	掃碧廊	不明
54	杭州	西湖外周	射騎灣亭	2002か
55	寧波	天一閣	西大門	不明
56	寧波	天一閣	東明草堂	1980再建
57	寧波	天一閣	刻書室	不明
58	寧波	天一閣	范氏故居	1829再建
59	寧波	天一閣	司馬第	不明
60	寧波	天一閣	水北閣	不明
61	寧波	天一閣	抱經亭	不明
62	寧波	天一閣	不明	不明
63	寧波	天一閣	書畫館	不明
64	寧波	天一閣	状元亭	1852か
65	寧波	天一閣	南大門	不明
66	寧波	天一閣	秦氏支祠	1925
67	寧波	天一閣	不明	不明
68	寧波	天一閣	不明	不明
69	寧波	天一閣	不明(芙蓉洲の門)	復原(清様式)
70	寧波	天一閣	平和堂	復原(清様式)
71	寧波	天一閣	■堂	復原(清様式)
72	寧波	天一閣	四明亭	不明
73	寧波	天一閣	■亭	不明
74	寧波	天一閣	林泉雅会館	不明
75	寧波	天一閣	凝暉堂	1986
76	寧波	天一閣	百鶴亭	明(万歴年間) →1959(移築)
77	寧波	天一閣	不明	不明
78	寧波	天一閣	八獅亭	不明
79	寧波	天一閣	千晋齋	1933
80	寧波	天一閣	不明	不明
81	寧波	天一閣	宝書樓	不明
82	寧波	天一閣	尊經閣	光緒年間 (1875-1908)か
83	寧波	天一閣	不明	不明
84	寧波	天一閣前	不明(機械室)	不明
85	寧波	天一閣前	知魚・照書	不明
86	寧波	月湖周辺	不明	不明
87	寧波	月湖周辺	寒光臺	不明
88	寧波	月湖周辺	不明(賀秘■祠内)	不明

通し 番号	地域	園林名(場所)	建築名	建設年
1	上海	豫園	湖心亭	不明
2	杭州	西湖外周	望湖樓	1985再建(964)
3	杭州	西湖外周	餐秀閣	1985か
4	杭州	西湖外周	(断桥残雪)	不明
5	杭州	西湖外周	(断桥残雪)	不明
6	杭州	西湖外周	(断桥残雪)	不明
7	杭州	西湖外周	梅鶴軒	不明
8	杭州	西湖外周	西泠書畫院	不明
9	杭州	西湖外周	不明	不明
10	杭州	玉皇山周辺	七星亭	不明
11	杭州	玉皇山周辺	(櫻花地)	2008
12	杭州	玉皇山周辺	(櫻花地)	2008
13	杭州	玉皇山周辺	涼亭(櫻花地)	2008
14	杭州	玉皇山周辺	天眞山碑亭	2008
15	杭州	玉皇山周辺	不明	2008
16	杭州	玉皇山周辺	不明	2008か
17	杭州	玉皇山周辺	捲江亭	不明
18	杭州	玉皇山周辺	月宝亭	不明
19	杭州	玉皇山周辺	得意亭	不明
20	杭州	虎跑夢泉	不明	不明
21	杭州	虎跑夢泉	叟純亭	不明(新)
22	杭州	虎跑夢泉	虎跑會館	不明
23	杭州	虎跑夢泉	不明	不明
24	杭州	虎跑夢泉	浮香澗挈軒	不明
25	杭州	虎跑夢泉	不明	不明
26	杭州	虎跑夢泉	樾翠閣	不明
27	杭州	虎跑夢泉	翠■堂	不明
28	杭州	虎跑夢泉	■軒	不明
29	杭州	虎跑夢泉	■冷■亭	不明
30	杭州	虎跑夢泉	蘿漢堂	不明
31	杭州	虎跑夢泉	不明	不明
32	杭州	虎跑夢泉	仰止亭	1981
33	杭州	虎跑夢泉	清音亭	不明
34	杭州	虎跑夢泉	濟公塔院	不明
35	杭州	虎跑夢泉	玉帶池	不明
36	杭州	虎跑夢泉	含暉亭	不明
37	杭州	湖心亭	不明	不明
38	杭州	湖心亭	明秋亭	不明
39	杭州	湖心亭	湖心亭	不明
40	杭州	湖心亭	湖山一覽	不明
41	杭州	湖心亭	振鷺亭	不明
42	杭州	湖心亭	水搖鸞碧	不明
43	杭州	三潭印月	我心相印亭	不明
44	杭州	三潭印月	御碑亭	不明

(*物件名が全く明らかに出来なかったものは不明としたが、一部だけ明らかなものは不明部分のみ"■"を用いた。)

226	上海	豫園	望江亭	不明
227	上海	豫園	挹秀亭	不明
228	上海	豫園	不明	不明
229	上海	豫園	魚樂榭	不明
230	上海	豫園	不明	不明
231	上海	豫園	會心不遠	不明
232	上海	豫園	亦舫	不明
233	上海	豫園	万花樓	1843
234	上海	豫園	兩宜軒	不明
235	上海	豫園	古井亭	不明
236	上海	豫園	藏寶樓	不明
237	上海	豫園	學圃	不明
238	上海	豫園	点春堂	1868
239	上海	豫園	打唱台	不明
240	上海	豫園	快樓	不明
241	上海	豫園	和煦堂	不明
242	上海	豫園	聽鸛	不明
243	上海	豫園	不明	不明
244	上海	豫園	不明	不明
245	上海	豫園	老君殿(娘々殿)	不明
246	上海	豫園	会景樓	1870
247	上海	豫園	不明	不明
248	上海	豫園	流觴亭	不明
249	上海	豫園	九獅軒	不明
250	上海	豫園	玉華堂	不明
251	上海	豫園	聽濤閣	不明
252	上海	豫園	積玉廊	不明
253	上海	豫園	涵碧樓	不明
254	上海	豫園	不明	不明
255	上海	豫園	洞天福地	不明
256	上海	豫園	靜觀大庁	不明
257	上海	豫園	聳翠亭	不明
258	上海	豫園	船舫	不明
259	上海	豫園	觀濤樓	不明
260	上海	豫園	還雲樓	不明
261	上海	豫園	古戲台	1888
262	上海	豫園	不明(内園)	不明

181	蘇州	留園	石林小屋	不明
182	蘇州	留園	揖峰軒	不明
183	蘇州	留園	林泉香碩之館	光緒年間 (1875-1908)か
184	蘇州	留園	冠雲台	不明
185	蘇州	留園	佇雲庵	不明
186	蘇州	留園	冠雲亭	不明
187	蘇州	留園	冠雲樓	不明
188	蘇州	留園	佳晴喜雨伏雪之亭	不明
189	蘇州	留園	可亭	不明
190	蘇州	留園	聞木樨香軒	不明
191	蘇州	留園	涵碧山房	不明
192	蘇州	留園	明瑟樓	不明
193	蘇州	留園	綠蔭	不明
194	蘇州	留園	亭	不明
195	蘇州	留園	不明(東園南小門)	不明
196	蘇州	留園	亦不二亭	不明
197	蘇州	留園	遠翠閣	不明
198	蘇州	留園	汲古得綆処	不明
199	蘇州	留園	不明	不明
200	蘇州	留園	大庁	不明
201	蘇州	留園	門庁	不明
202	蘇州	芸圃	芸圃	不明
203	蘇州	芸圃	乳魚亭	明代
204	蘇州	芸圃	思嗜軒	不明
205	蘇州	芸圃	朝■	不明
206	蘇州	芸圃	南斎	不明
207	蘇州	芸圃	香草居	不明
208	蘇州	芸圃	响月廊	不明
209	蘇州	芸圃	響月廊	不明
210	蘇州	芸圃	延光閣(水榭)	不明
211	蘇州	芸圃	博雅堂	不明
212	蘇州	芸圃	鳴谷書堂	不明
213	蘇州	芸圃	世倫堂	不明
214	蘇州	芸圃	不明	不明
215	蘇州	芸圃	不明	不明
216	蘇州	環秀山莊	不明	不明
217	蘇州	環秀山莊	有穀堂	不明
218	蘇州	環秀山莊	環秀山莊	不明
219	蘇州	環秀山莊	問泉亭	不明
220	蘇州	環秀山莊	補秋房	不明
221	蘇州	環秀山莊	半潭秋水一房山	不明
222	上海	豫園	不明	不明
223	上海	豫園	三德堂	1760
224	上海	豫園	仰山堂	1866
225	上海	豫園	漸入佳境	不明

135	蘇州	拙政園(中央部)	亭	不明
136	蘇州	拙政園(中央部)	海棠春塢	不明
137	蘇州	拙政園(西部)	宜尚亭	不明
138	蘇州	拙政園(西部)	倒影樓	不明
139	蘇州	拙政園(西部)	浮翠閣	不明
140	蘇州	拙政園(西部)	不明	不明
141	蘇州	拙政園(西部)	与誰同坐軒	不明
142	蘇州	拙政園(西部)	笠亭	不明
143	蘇州	拙政園(西部)	留聽閣	不明
144	蘇州	拙政園(西部)	三十六鴛鴦館	不明
145	蘇州	拙政園(西部)	十八曼陀羅花館	不明
146	蘇州	拙政園(西部)	塔影亭	不明
147	蘇州	平江沿い	不明(平江概説)	不明
148	蘇州	平江沿い	不明	不明
149	蘇州	平江沿い	不明	不明
150	蘇州	平江沿い	魚雨軒	不明
151	蘇州	平江沿い	波月	不明
152	蘇州	平江沿い	冷香水榭	不明
153	蘇州	平江沿い	仁義	不明
154	蘇州	十全街沿い	不明	不明
155	蘇州	網師園	大門	不明
156	蘇州	網師園	輻庁	不明
157	蘇州	網師園	大庁	不明
158	蘇州	網師園	花庁・擲書樓	不明
159	蘇州	網師園	五峰書屋・詠画樓	不明
160	蘇州	網師園	集虛斎	不明
161	蘇州	網師園	竹外一枝軒	不明
162	蘇州	網師園	月到風來亭	不明
163	蘇州	網師園	濯纓水閣	不明
164	蘇州	網師園	不明	不明
165	蘇州	網師園	小山叢桂軒	不明
166	蘇州	網師園	蹈和館	不明
167	蘇州	網師園	琴室	不明
168	蘇州	網師園	梯雲室	不明
169	蘇州	網師園	看松詠画軒	不明
170	蘇州	網師園	冷泉亭	不明
171	蘇州	網師園	殿春蔭	不明
172	蘇州	網師園	亭	不明
173	蘇州	留園	大門	不明
174	蘇州	留園	曲谿樓	不明
175	蘇州	留園	濠濮亭	不明
176	蘇州	留園	西樓	不明
177	蘇州	留園	清風池館	不明
178	蘇州	留園	五峰仙館	不明
179	蘇州	留園	鶴所	不明
180	蘇州	留園	還我詠書処	不明

表2 拙政園の変遷



蘇南区文物管理委員会の管理となり修繕が行われるが、東部は修復されず、菜園と職工の宿舍とされていた。

園林管理局が直接管理を行うこととなる。

「掃田園居」の廃墟の跡に、整備が進められ、放眼亭・芙蓉榭・秫香館を新築、その後も建設整備が進められている。

遷年	園林名	所有・管理者	注記
明代中期: 正徳年間(1506-21)	拙政園	王献臣 徐氏	もとは大宏寺であったところに、官僚の王献臣が敷地を占有して私邸園林を造営する。王献臣の子は賭博のために徐氏にゆずる。荒廃し、東部は分割されて「掃田園居」が建てられる。
明代末期 1631(1635)~	「掃田園居」(東部)	東部:王心一	1631年、東部を王心一が買い上げ、1635年、「掃田園居」が落成。「池を掘りその土を積んで山を築き、池の上、山の間ゆるすところに建物が建てられた。」(木津)。
清代初期: 順治年間(1644-61)		中央部・西部:陳之遼 中央部・西部:王永寧	中央部・西部が回復・再建され官僚の別荘となる。中央部・西部が陳之遼の所有となる。中央部・西部が駐坊將軍府・兵備道館となる。中央部・西部が呉三桂の嫡の王永寧の所有となる。
清代: 康熙年間(1662-1863) 康熙18(1679) 康熙22(1683)	蘇松常道新署 (西部) (中央部)	中央部:王氏 西部:顧氏	中央部・西部が呉三桂の失脚後、官の所有と園内の建設は隆盛をきわめ、丘や谷を置き、建築物も増加するなど、大きな改変が行われ王氏と顧氏が分居し、中央部と西部に分割される。「拙政園」から、池中に土の丘と一棟の樓が確認できる。
清代: 雍正年間(1723-35)			
清代: 乾隆年間(1736-95)			
乾隆初年	「書園」 「復園」	西部:葉士寬 中央部:蔣榮	中央部を「復園」、西部を「書園」とし、二つの部分に分けられた。この時以来拙政園の名称をそのまま用いているのは中央部のみとなる。
嘉慶14(1809)		中央部:查世倬	
嘉慶末年	「呉園」	中央部:吳璣	
咸豐10(1860)	忠王府	李秀成	太平天国の忠王李秀成による忠王府となる。
同治2(1863)	(汪氏宅)	西部:汪氏	太平天国の失敗により、中央部は官の所有となり、西部は汪氏の所有に帰する。
同治10(1872)	八旗奉直会館		中央部は「八旗奉直会館」と改められるが、園林の名は依然「拙政園」と呼ばれる。
光緒3(1877)	「補園」	西部:張履謙	西部が呉興の張履謙の所有となり名を「補園」と改める。
民国27(1938)	省政府事務所 (張博淵) (奉直会館) (官舎の一部)	陳則民	日偽維新政権江蘇省長陳則民が省政府の事務所とし、西部は張博淵に、中央部は奉直会館に貸し出され、東部は管理するものがなく、官舎の一部となっていた。
1946	国立社教学院 (教室・校舎) (宿舍・グラウンド)		国立社教学院が四川の璧山から蘇州に移り、拙政園を校舎として借りる。
1948	張逸侖	西部:張逸侖	張逸侖が西部を借りる。
1949	蘇南行署蘇州專員公署		蘇州解放後、社教学院は無錫に移り、蘇南行署蘇州專員公署となる。

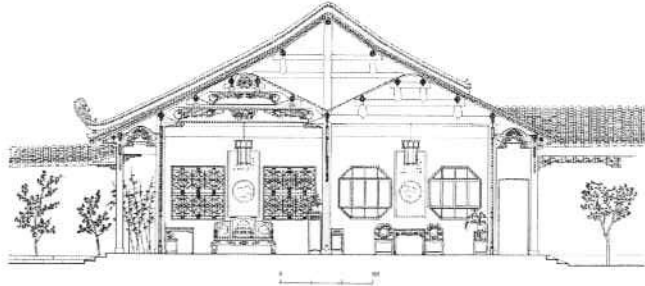
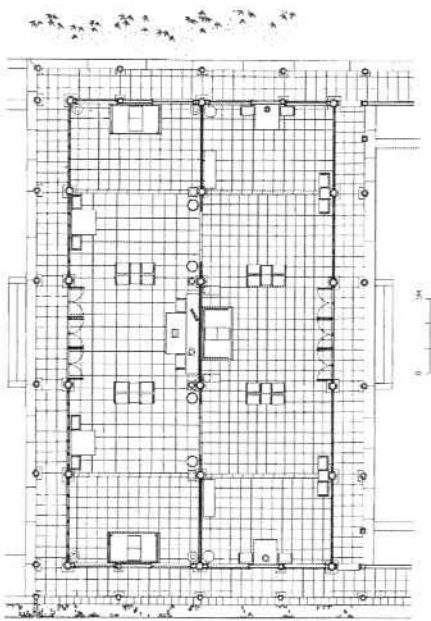
表3 『高遊會図録』にみられる席

	発会 昭和3(1928)	第二次 昭和4(1929)	第三次 昭和5(1930)	第四次 昭和6(1931)	第五次 昭和7(1932)					
貴茶堂	落慶式	落慶式	京都石原綱七	献茗(献茶)	大阪水原金兵衛	献茗(献茶)	大阪松風清社	献花	大阪松風清社	献花
賈茶堂								献進(献茶)	大阪松風清社	献進(献茶)
通仙亭			加納康正	茶席	京都林 林華園	茶席				
有声軒(広間)	加納玉泉	待合	大阪野村得庵	待合	大阪湯川七石	待合	小河愛梅居	待合	大阪八田西洞	寄付
有声軒(小間)	加納玉泉	茶席	大阪野村得庵	本席	大阪湯川七石	茶席	小河愛梅居	茶席	大阪八田西洞	茶席
松陰堂	(萬福寺寶物)	展観席	(梅逸造墨)	展観席	(直入居士遺墨)	展観席	(青木豊米翁遺品)	展観席	(明清書画)	展観席
松陰堂					(上田秋成翁遺品)	展観席	(賢名海屋翁遺墨)	展観席		
松陰堂	大阪昌隆社	茶席	京都平安會	茶席					大阪松風清社	茶席
天王殿							大阪松風清社	献花(清め式)	大阪平井連山	明清樂(演奏)
天王殿							大阪松風清社	献茗(手前)		
天王殿廻廊					兒嶋米山居	待合				
天王殿廻廊	大阪横江竹軒	茶席			兒嶋米山居	茶席	京都土橋永昌堂	茶席		
天王殿廻廊					大阪松風清社	茶席(立禮)	—	小餐席		
山内天王殿廻廊鐘下	東京吉田白雲居	茶席	一新社	茶席	大阪武川六石	茶席				
山内鐘樓下					—	蕎麥席			大阪篠堂山中吉郎兵衛	茶席
境内(山内)松林	京都水野友竹居	茶席					大阪金澤治三郎	香煎席	京都昌蓮堂善田喜一郎	香煎席
西方丈	大辻草生	前席	(開中禪師遺品)	展観席					大阪松風清社	献花(清め式)
西方丈	大辻草生	茶席	大阪松風清社	茶席					大阪松風清社	献茗(手前)
東方丈	京都平安會	待合	昌隆社	待合						
東方丈	京都平安會	前席	昌隆社	待合						
東方丈	京都平安會	茶席	昌隆社	茶席						
東方丈	(亮茶翁遺愛品)	展観席								
新築客殿							大阪松風清社	盛花瓶華席	大阪松風清社	盛花瓶華席
							大阪松風清社	茶席(立禮)		

表4 園林建築と茶室の違い

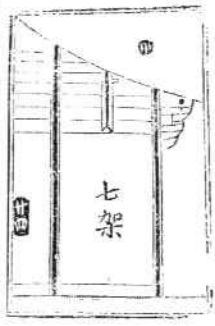
	園林建築	茶室	技術	機能	社会	習慣	美意識	備考
彫刻	有り	なし						● 明らか人工的要素を省く抹茶室と園林建築の違いと言えよう。
組子	有り	(煎茶に有り)						● 煎茶室においては園林建築と同じ理由で採用され、抹茶室においては素朴に見せる美意識の違いと言えよう。
飾り装置	建具・家具(懸壁・紗櫛・卓)	造り付け(床・棚・書院)		●	●	●		● 中国では室内に家具を常駐的に多用するが、日本において、また特に茶室においては、可動するものは全て道具といってよく、建物の機能、社会や習慣の違いが大きいと茶室では微妙な色付は見られるものの、園林建築のような塗装は金沢などに見るごく一部の漆塗の茶室がやや近いと思われる程度であり、美的要因が強いのではない。
塗装	漆塗	(漆塗)・色付						● 茶室ではできるだけ自然の素材感を希求する美意識の違い、そして塗装の違いといった技術的相違とも関連しているかと思われる。
材料	漆塗丸太・角材	皮付丸太・面皮丸太	●					● 茶室では起りが見られる一方、園林建築では正反対に反りが重視されている。そしてそのために水疱発飯といった特別な技術まで開発されている。
屋根	反り	起り	●					● 水疱発飯は二重垂木を必要とし、軒の違いに現れる。
軒	二重	一重	●					● 園林建築では架構を一つの見所としており、様々な小屋組が見られるが、茶室では天井を貼るため、天井の形や材料に凝ることはあっても、見えない小屋組は東と貫を使用した画一的なものである。
小屋組	多様	画一的	●					● 日本に於いては寺院建築特有のものと言え、社会的要因が大きい。
斗拱	有り	なし			●			● 茶室では狭い空間を更に天井によって空間を分節している。園林建築では天井を設けることが一部にあるものの、人の配置を考慮した空間分節までは行っていない。そこに天井の必要性について社会的、或いは機能的な違いがある。
天井	空間分節なし	空間分節有り		●	●			● 天井の有無という技術的要素が大きいと考えられる。
梁	見せる	見せない	●					● 天井の有無という技術的要素が大きいと考えられる。また、わざわざ見せかけるのは美的要因といえるか。
桁	見せる	見せかける	●					● 茶室において壁中の貫の有無といった技術的側面と、風炉先窓、墨跡窓といった機能的側面、そして、採光を絞るといった美的側面が大きく作用していると考えられる。
窓	画一的な配置	自由な配置	●	●				● 材料の違いといった技術的側面と、茶室においては特に聚楽土といった美的側面が要因と考えられる。
壁	磚+漆喰、板	土	●					● 茶室では貫が多様されるため、頭貫の必要性は低く技術的要素と考える。
頭貫	有り	なし	●					● 壁材の違いといった技術的側面と、壁を出来るだけシンプルにするといった美意識とが考えられる。
貫	見せる	見せない	●					● 壁材の違いと大きく関係しており、技術的な違いと言えよう。
地覆	一部有り	なし	●					● 流通する材料とといった技術・社会的側面と美意識の違いに原因があると思われる。
柱	太い	細い	●		●			● 土間と畳といった生活習慣の違いが大きいと言えよう。
床(ゆか)	磚敷十間	畳、(磚敷十間)			●			● 基礎の違いと同様の理由、そしてまた、日本において磚敷は禪宗寺院特有のものと言え
礎盤	有り	なし			●			● 茶室では人工的な基礎には建せず、自然石に直接建つように見せる美的要因と、日本の住宅では基礎は殆ど使用されないため、社会的要因とも言える。
基礎	有り	なし			●			

↑『中国の名庭—蘇州古典園林』（参考文献参照）より転載

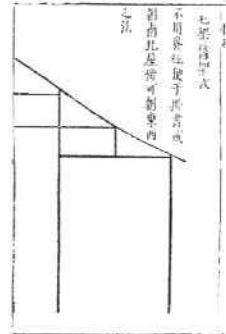


↑『明魯般營造正式（天一閣藏本）』（上海科学技术出版社、1988）より転載

正七架法二回條
七架堂屋大凡能造合用前後柱高一丈六寸椽高一丈令六寸中間用一丈四尺三寸次間一丈三尺六寸椽一丈六寸其間則高底深淺隨人
堂好堂堂 並是工師巧主張
堂由繩尺得也須合用安後傍

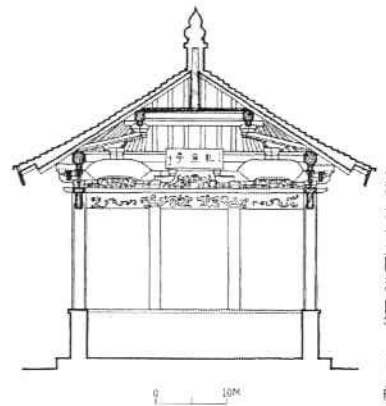
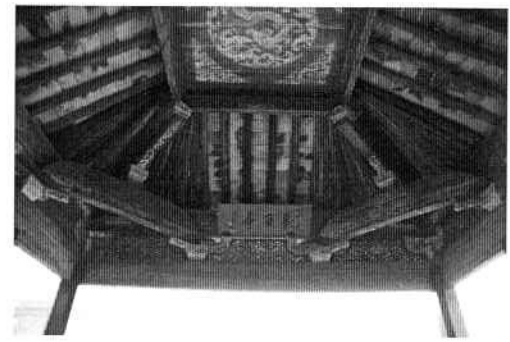


曲尺曲小下所得兩部之字曲者形面厚依勢而曲或錐山巒或形水際通者淺深宛宛無窮
五架堂
五架堂乃廳堂中過堂也如前後各添一架介七架梁架式如前所添必須厚架面而散不然則深下內里暗者斷散也如欲寬展前手外一節又小五架堂其兩端柱可稍前後也



↑橋川時雄『園冶』（渡辺書店、1970）より転載

図1 『營造正式』（左）と『園冶』（右）



↑『中国の名庭—蘇州古典園林』（参考文献参照）より転載

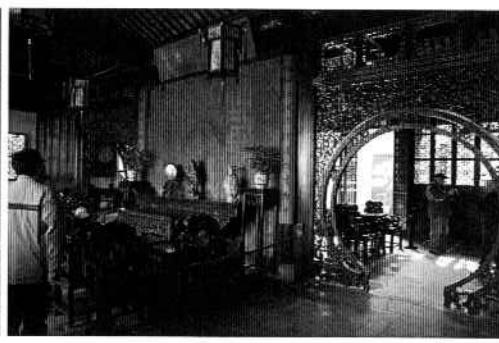
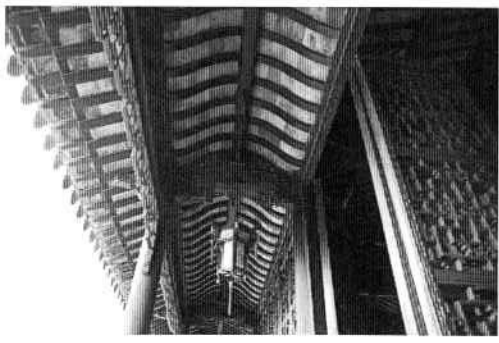
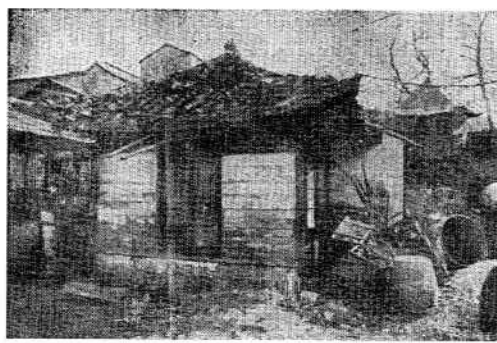


図3 林泉書碩之館



↑童『江南園林志』（中国工業出版社、1963）より転載

図2 乳魚亭

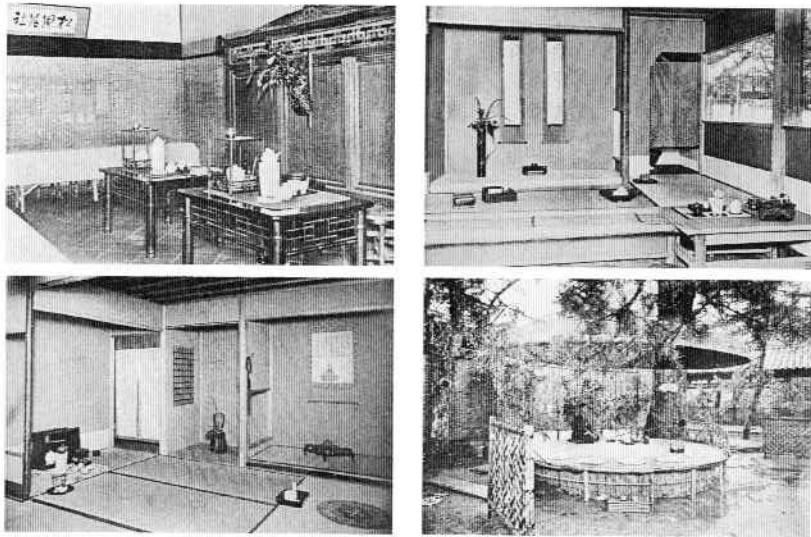


図5 『高遊會茗筵図録』より(左下は「有声軒」)

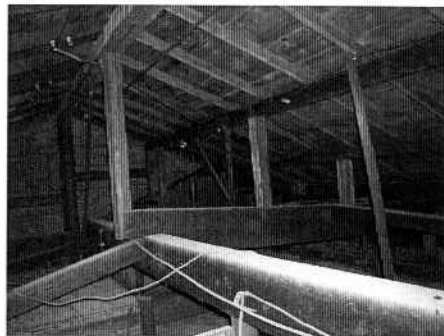
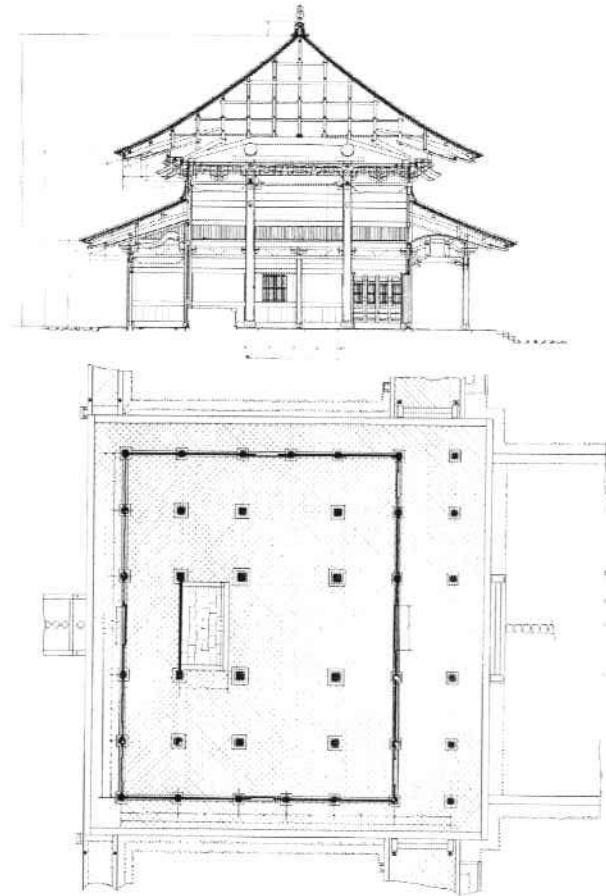


図6 有声軒



図4 大雄宝殿



← 京都府教育委員会『重要文化財萬福寺大雄宝殿
・ 禅堂修理工事報告書』(便利堂 1970)より転載

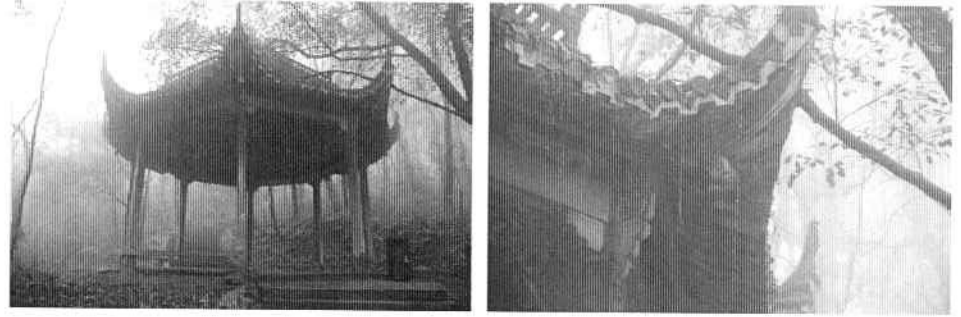


図7 RC造の「月宝亭」

